



いなりぎ とがわすわまる  
**稲荷木遺跡・戸川諏訪丸遺跡 (秦野市No. 11・136)**

**所在地** 秦野市戸川 1196-1 外  
**期間** 平成 31 (2019) 年 4 月 1 日～  
 令和 2 (2020) 年 3 月 31 日  
**調査面積** 13,967㎡  
**担当者** 山田仁和・阿部友寿・天野賢一  
 丸吉繁一・加藤久美・絹川一徳  
 大塚健一・栗原伸好・木村吉行  
 矢口孝悦・村澤正弘・澁谷正信  
 瀬田哲夫・影浦 覚  
 小森明美・吉田浩明



図1 調査地の位置 (1/25000)

**調査概要**

調査は新東名高速道路建設事業 (秦野市戸川地区) に伴う発掘調査として、2016(平成 28)年度から開始され、現在も継続中です。

発掘地点は、秦野市の西端部にあたり、小田急小田原線渋沢駅の北方約 2.5km に位置します。調査区は金目川水系の支流である水無川左岸の段丘上にあたり、矢坪沢と呼ばれる深い開析谷に挟まれた標高 260 ～ 270 m の丘陵南斜面に位置しています。図 2 で示した調査区のうち、2 区 (平成 28 年度調査) および 19 区は、戸川諏訪丸遺跡に、それ以外の調査区は稲荷木遺跡に該当します。

矢坪沢を挟んだ対岸は横野山王原遺跡、水無川対岸は堀西下森戸遺跡が所在しています。

これまでに、近世の宝永火山灰廃棄遺構、奈良・平安時代の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・ピットなど、縄文時代の住居跡、配石、陥し穴が発見されています。

(1) **近世** 今回の調査では、宝永火山灰廃棄遺構、段切状遺構等が発見されています。耕作地などに降り積もった宝永火山灰を処理した廃棄遺構はほぼ調査区全面から見つっていますが、分布の状況や延伸方向などからは、いくつものまとまりが確認されます。

(2) **中世** 掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、ピット等が発見されています。土坑は平面形が円形を呈する、いわゆる円形土坑が多くを占めます。

(3) **奈良・平安時代** 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、ピット等が発見されています。竪穴建物跡は群在して分布する傾向がうかがえますが、重なり合うものは少なく、お互いに距離をとって建てられています。

(4) **縄文時代** 住居跡 92 基のほか、列石、配石、集石、焼土跡、土坑、ピット等が発見されています。

遺物は、前期末葉から後期中葉までの土器が

時期的にほぼ切れ目なく見つかっており、石器は多量かつ多種（磨製石斧・磨石・石皿・凹み石・石錘・打製石斧・石鏃・石錐・剥片類）なものがみられます。また、土製品（土偶・耳飾り・土器片錘・土製蓋）や石製品（大珠・垂飾・石棒等）が出土しています。

住居跡は92基見つっています。そのうち64基は床面に礫が敷かれた柄鏡形（敷石）住居跡です。住居の時期は、中期後葉および後期前葉が中心です。（図2参照）

中期の住居跡は、図中、緑色で示していますが、赤色破線で示した墓坑群を取り囲むように半円形に集中して分布しています。住居跡の集中する範囲の西側は、現状では水無川の河川敷に向かう崖状の地形となっています。住居跡が崖線にごく近接した位置でも見ついていることから、本来、住居の分布は環状を呈していたものの、後世の地形改変によりその半分が失われたものとも推定されます。

後期の住居跡（図中青色）は、柄鏡形（敷石）住居跡が主体を占めています。後期前葉住居跡は構築される位置を少しずらしながら2～3段階の造り替えが認められることが特徴として挙げられます（写真8～10）。このような同一の地点に繰り返し住居を造るという行為が「何を意味しているのか、なぜ別の場所ではなく同じ場所が選ばれたのか」という問題の検討からは、縄文人の土地や生活領域についての意識に迫れるきっかけを得られるかも知れません。また、これらの住居跡は大きく3群の列状に並ぶ配置をとっています。その前面には、大きな河原石

を用いて列石や配石および配石墓が住居跡群に対応するように造られています。多量の礫を用いた、構築に多大な労力を要すると思われるこれらの遺構は、住居構築位置の継続性（繰り返し）とともに、この場所への当時の人々の強いこだわりを示しているようです。

## まとめ

これまでの調査成果により、奈良・平安時代や縄文時代の集落の全体像が徐々に明らかになってきました。

奈良・平安時代の建物跡は、ほぼ調査区全体に相互に距離を取って分布しています。限られた時間幅のなかで集落が営まれていたことが、出土遺物の時期とも合わせ想定されます。

縄文時代の集落については、中期初頭に丘陵尾根部に住居群が造られはじめ、中期中葉には、段丘上におそらくは環状を呈する集落が中央に墓域を囲んで大規模に展開しています。後期前葉～中葉期においては柄鏡形（敷石）住居跡が造られます。また、住居跡群の前面に列石や配石が見つっています。配石群の周囲では、土器・石器等の遺物を多量に含む遺物包含層が発達しています。この列石前面の包含層直下は、縄文時代の古い時期の土層堆積が失われており関東ローム層上面となっています。このことから、後期の時期に石垣状に積まれた列石を境として、土地の段切状の造成や削平など大規模な造成を行っている可能性も捉えられつつあります。（山田仁和）

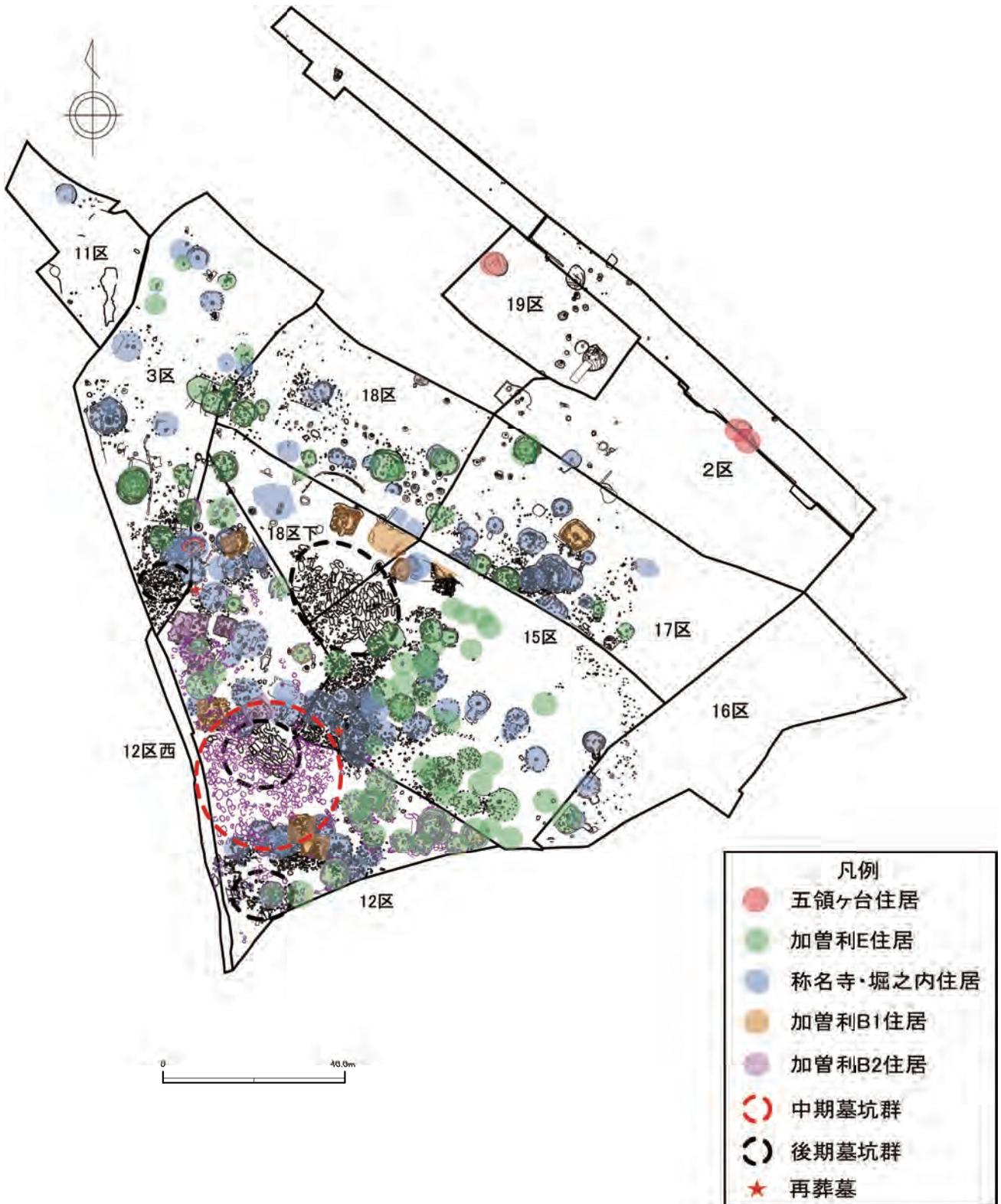


图2 稻荷木遺跡縄文時代遺構全体図



写真1 12区縄文面完掘状況（北から）



写真2 12区縄文面完掘状況（南から）

調査終了時の状況。遺構の重複が激しく、無数の掘り込みがみられます。これらは、同時に機能していたわけではなく、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて繰り返し造られた遺構が累積したものです。



写真3 17区上 縄文面完掘状況(南東から)



写真4 17区上J10号・J12号・J14号住居跡・J10号・J11号配石(南西から)

写真奥側には、やや位置をずらして造られた住居跡が多重に重複する様子がみられ、住居の前面には左右に長く列石が延びます。列石は2～3段石垣状に積まれ、段差が作り出されています。



写真5 17区上 J 2号住居跡 (南西から)



写真9 17区上 J 12号住居跡 (南西から)



写真6 17区上 J 3号住居跡 (南から)



写真10 17区上 J 17号住居跡 (南西から)



写真7 17区上 J 7号住居跡 (南西から)



写真11 17区上 J 20号住居跡 (北から)



写真8 17区上 J 10号住居跡 (南西から)



写真12 17区上 J 23号住居跡 (南西から)